



榮華も槿花一朝の夢、山脇商店も此の時がピークで漸次左り前になり、四苦八苦の末大正九年初夏西川さんが胃潰瘍で病臥中助力を懇請して來た。義に厚い西川さんは自らは独乙の様に食糧封鎖を受け、僅々ウエハースで栄養をつけないで居られる状態乍ら山脇の窮状見るに忍びずとて私に善処する様命ぜられた。

さて話は一変する。この寒天の製法たるや全く原始的で自然相手の天候まかせである。予々この製法の脱皮を説かれて居たのが誰であろう金子さんで、鳴屋製油工場内に研究所を設け、今の太陽林産の専務蔵原さん等を動員しリサーチに乗り出し、苦心の結果遂に製法に新機軸を作り特許を得獲した。併し乍ら、當時としては仲々採算ペースに乗らず営利化するまでには程遠かった。

五、人絹とナメクジ物語り

五、人絹とナメクジ物語り

ね、日当りのよい所程西日のかけりもひどいに定つて居る。よい時の裏には必ず落ち目もあると考えておくがよい。」と他日この言葉が大きな役割りをして強弱解け合いに重要な基礎となつたと聞いて居る。鈴木商店に来てからも四六時中米を取り組んで居れば機嫌がよかつた。今日ならさしづめ無形文化財に推賞される資格十分の人物と思つて居る。

八 罷と心の糧

さて鉢木商店が大正七年八月に米騒動のトバッチャリをうけ焼き打ちの災厄に遇い十六個のシャンデリアが輝く旧ミカドホテルの建物が一夜にして灰燼に帰し、その跡に昼夜の突貫工事で僅々二週間でバラックの平家事務所が新築された。構造は中廊下を挟んで左右に机が並び見通しのよい開放的な営業店舗であった。

この廊下の突き当たりが支配人室で此處から右へ曲ると大食堂に通じる。数百の社員が、重役から見習員に至るまでセルフサービスの飯檻を囲んで和氣あいあいの談笑、ストレス解消のユートピアで最適の憩いの場であった。傍ら一つ竈の食堂は正面名林高僧聴聞の心の糧の修練道場でもあった。名僧と云えば釈宗演、

九、大手本宅と聚楽第

臨機勿讓 当事再思  
勿妄想過去 遠慮将来  
負丈 夫之氣 抱小兒之心  
就寢如蓋棺 離褥如脫屣  
である。一方西川さんの先導により  
平野祥福寺に詣で「青山元不動 白  
雲自去來」の大幅の懸る方丈に一同  
が露坐聴聞など心の糧の恩澤は忘れ  
難い機縁となつてゐる。

間宮英宗、前田聰雲等の老師も留錫され、前号「たつみ」に釈宗演の坐右の銘と称して拙筆が紹介されたが、あれは編輯部の希望に応じて答えたもので詳しく述べる。

がつた。

が後シテになると鬼面の相で襲いかかって来る。事実金融に追われて剣の刃渡りの様なきわどい矢先とて二進も三進も動きが取れず、債鬼門に迫り文字通り不眠不休の日が続いた。そんな時、どうしたはずみか不図昔聞いた、大手のお邸の地相の話、金子さんの姫路城の話など暫くは過去の妄想追憶が容易に払拭でき

暎き終えて朝顔の鉢札寂し  
蝶やうつろとなりし樹の枝に

六、西川京子の永訣と追憶  
「子に生きて」の記念出版が脩竹  
誠の後をうけて養嗣子政一氏によ  
り昭和九年に上梓されて居る。これ  
知っている人は限られて居るので  
少く紹介すると刀自が昭和七年六  
月に二男四女を残して可惜鬼籍に入  
れた数年後に政一氏の手により出  
されたもので金子夫妻を初め懇親  
人々八十八名の寄稿を載せ四百頁  
なる大版である。淑女貞節の誉高  
い母の恩愛を顧みて切々惻隱の情  
締られた玉稿に交つて拙稿も亦採

東の探題に擬せられた人物丈けに、其の出處進退は如何にも重大であつた。その転進はただ事でなく私は朝鮮へ帰るのを引き延ばして袖を引き止めたが時の流れは如何ともし難つた。話の内容は省くが、其の後窪田さんは日粉社長に転出、池上、松井両氏も亦鈴木商店と袂を別つたことは周知の通りで、敗軍の兵将を語らずで、すべては運命である。同じ土佐人で浜口首相と竹馬の友であつた朝鮮の元大邱織綿工場長で現羽幌炭礦専務の横田周作氏の叔父に当る洒豪の小川徳長さんは下世話の事例を引用して話された「偕老同穴の良妻必ずしも良人の気に入りとは限ら

違ひなくその產地を當てたと云う人。堂島米穀取引所の受渡米鑑定人で現今の様にコンピューター等のない時代に日本六十余州を経めぐつて其の年の作柄と収穫の予想を建て農務省に先んじて統計を発表したと云う。御本人頗る無慾恬淡、性又開放的で商売騒などさらさらなく潔白な風格を備えて居た。翁の話によると、當時米買占に石井定七が猛威を振って居る最中堂島取引所に行つて見ると強弱両陣互に対峙して鎬を削り甲論乙駁して居る処なのでその中に割つて入り「お前達みんな、偶には耳に逆う反対意見も耳を傾けお互同志ゆつくり吟味し合つたらどうか

語りが掲載され、女将の話が沢村談となり無頓着の金子さんの性行の片鱗となるなど私の知らぬエピソードが仰々しく紙面を賑わして居たのにはビックリした。「帝人の歩み」にもナメクジ物語は余りのナンセンスとして遂に日の目を見ず代りに泰さん的人物月旦として一六一頁に氏は大変な八釜敷屋でバルチザンの仇名があり、之に反して満枝夫人は特別優しく美しい方であったと結んで居る。兎もあれコミカルとウエットが入り交り懐しい憶出が残って居る。

七 無形文化財 松下豊吉翁

昭和元年八月の初秋即ち鈴木商店整備の前年である。偶々鎌倉香風園に於て時の東京支店長窪田駒吉さんと池上、松井の両兄を交えて会談、寝耳に水の悲報を受けた異常なショックを受けた「子に生きて」にはKさんと名前を伏せたが今になって真相を打明けると、問題は西川さんさえ生きて居れば恐らくは如斯事態は起らざり得ないとの推測を語ったものである。当時の窪田さんと云えば土佐閥の錚々たるメンバー金子の四天王とも噂され、関東の探題に擬せられた人物丈けに、其の出處進退は如何にも重大であった。その転進はただ事でなく私は朝鮮へ帰るのを引き延ばして袖を引き止めたが時の流れは如何とも難つた。話の内容は省くが、其の後窪田さんは日粉社長に転出、池上、松井両氏も亦鈴木商店と袂を別つことは周知の通りで、敗軍の兵将を語らずで、すべては運命である。同じ土佐人で浜口首相と竹馬の友であった朝鮮の元大邱織綿工場長で現羽幌炭礦専務の横田周作氏の叔父に当る酒豪の小川徳長さんは下世話の事例を引用して話された「偕老同穴の良妻必ずしも良人の気に入りとは限らず、二号三号の必要価値も生ずると云うもの、譜代の旗本が影をひそめ外様が幅をきかすのも時世と時節、人それぞれに信念あり、良否は時が解決する」とて示唆に富んだ物語をせられた。

## 七、無形文化財 松下豊吉翁

戦争景気の拡大に伴い、鈴木商店には多士濟々のエリートが雲の如く集まつた。その中にユニーケな変り種、一人を披露する。松下豊吉翁がそりでも一握りの米を手に取れば間違いくなくその産地を当てたと云う名人堂島米穀取引所の受渡米鑑定人で現今の様にコンピューター等のない時代に日本六十餘州を経めぐつて其の年の作柄と収穫の予想を建て農商務省に先んじて統計を発表したと云う。御本人頗る無慾恬淡、性又開放的で商売氣などさらなく潔白な風格を備えて居た。翁の話によると、當時米買占に石井定七が猛威を振つて居る最中堂島取引所に行って見ると強弱両陣互に對峙して鎧を削り甲論乙駁して居る処なのでその中に割つて入り「お前達みんな、偶に耳に逆う反対意見も耳を傾けお互に同志ゆつくり吟味し合うたらどうかなかつた。

### 十、ヘソ繰りと特許権

空中窒素肥料製造の特許権獲得に關する話、金子さんの姫路城の話など暫くは過去の妄想追憶が容易に払拭できなかつた。

が後シテになると鬼面の相で襲いかかつて来る。事実金融に追われて剣の刃渡りの様なきわどい矢先とて二進も三進も動きが取れず、債鬼門に迫り文字通り不眠不休の日が続いた。そんな時、どうしたはずみか不図昔聞いた、大手のお邸の地相の話、金子さんの姫路城の話など暫くは過去の妄想追憶が容易に払拭できなかつた。

空中窒素肥料製造の特許権獲得について日窒の野口遵さんと倫敦で高畠支店長とがわたり合い結局高畠さんの英断により五十万磅を出してクロード製法の特許権を獲得せられ金の糸を射止められたのは余りにも有名な話。當時本店の末輩共にどうしてこんな大金が倫敦にあつたのか、金繰りの厳しい本店で一寸想像もつかぬ事であったが「鼠」一七二頁によると倫敦支店では高畠さんの明敏に報じて居る。云うなれば山内一豊公全部を本店に出さず一部を支店に留め、その中から特許料を捻出したとて砂糖の買占め転売で得た利益金の夫人のヘソ繰り美談に彷彿する話と感ずる、鈴木商店開発の中核事業にまつわるエピソードである。

